

函館蔦屋書店におけるソーシャル・ビジネスの可能性

① 背景・目的・概要

函館蔦屋書店は、函館市石川町に立地している。中心市街地からは少し外れた所にあるにも関わらず、毎日多くの利用客で賑わっている。地元の人や多くの外国人観光客が利用しているだけでなく、毎日多くのイベントも開催されており、ただの“書店”とは違った存在になっているように感じられる。

本地域プロジェクトでは、2年後期にはそんな蔦屋書店の経営理念や方針を学び、市民や学生の参画によってより社会的な空間に出来ないか検討した。そして蔦屋書店を拠点としてソーシャル・ビジネスを展開出来るような空間づくりを目的とした。今回は2班に分かれて活動を行った。3年前期には、2年後期の活動を踏まえ、蔦屋書店を拠点として市民参加型のソーシャル・ビジネスを展開し、新たなコミュニティを創出することを目的とした。

1班ではこれまでは函館蔦屋書店をあまり利用していなかった・出来なかった人々にも利用してもらうため、蔦屋書店までの行き方など、情報提供やその仕組みを作ることを狙いとした。概要としては、蔦屋書店までのルートマップ・西部地区で活動している市民団体の紹介・蔦屋書店で行われているイベントの紹介等、蔦屋書店の紹介を含めたパンフレットの作製である。2班では、ソーシャル・ビジネスの利益は「集客」であるとし、集まった人同士で繋がりを生むこと、蔦屋書店を幅広い世代に利用してもらうことを目的とした。

② 年間スケジュール表

	1班	2班
夏休み	文献調査	
10月	函館蔦屋書店の理念及びソーシャル・ビジネスの意識共有	
11月	アンケート作成、質問内容推敲	
12月	アンケート調査、代表へのインタビュー調査	
1月	中間発表	
2月・3月	各班で進行	
4月	班内で相談	企画準備
5月	山本代表との打ち合わせ	企画準備・協力申請
6月	作成開始	企画準備
7月	作成途中	企画実行、振り返り
	最終発表	

③ プロセスと成果

2年後期に函館蔦屋書店で行った210名の方へのアンケート調査から、「イベント広報を増やして欲しい」「アクセスを改善して欲しい」といった声が多く挙がった。また、アンケートの結果を踏まえて、蔦屋書店で求められている文化活動（例：歴史・伝統、祭・郷土、国際交流）が分かったので、それらをイベントのジャンルとして視野に入れて実践していこうと考えた。

3年前期には、2年後期に行ったアンケート調査やイベントジャンル分けの結果から、「学び」に関するイベントが少ないことと、イベントが月におよそ100回行われているが、プレミアム・エイジ向けのイベントが少ないことが分かった。また、普段の生活の中で大学の先生の話聞く機会が少ないこと、協力に前向きな先生がいることから、「プレミアム・エイジ向け大学教授出張講演会」を実施し、参加者にアンケート調査を行った。およそ30人が足を止めて聞いてくれた、プレミアム・エイジが多く集まったという成果が得られた。

④ 総括と反省、今後の課題

総括

ソーシャル・ビジネスの定義を、私たちに出来る規模に置き換え、イベント等を実施することが出来たことが良かったと思う。

反省

1班においては、パンフレットの作製に行き詰まってしまい、活動期間内に完成まで持って行けなかったことは大きな反省点である。2班においては、イベントの企画の際に、蔦屋書店側とのもっと入念な打ち合わせと事前準備が必要であった。

課題

1班では、“学生”という立場からどこまで関われるかを明確にすること、パンフレット完成後は、蔦屋書店及び、蔦屋書店で作成している「peeps」の設置箇所に置かせていただくことが課題である。

2班では、イベントを実施することが出来たが、今後は自分たちが主体となったイベントを行っていかねばならないと考えた。今回のようなイベントが継続されていく必要がある。また、函館蔦屋書店を“場所”としてより活発に利用してもらえるように企画及び実行していくことが求めら

れると考える。そして、より活動に具体性を持たせること、自分たちが学校で学んでいることをイベントを通して発信していくことも課題である。

⑤ 地域からの評価

7月4日(水)15:30~@ 蔦屋書店 2階ステージ

「ハコダテ青空教室」～正義とは～ 講師：伊藤泰先生

このイベントの参加者より

- ・貴重な話を聴くことができた。
- ・法の話を知りやすく話してくれたおかげで面白かった。
- ・書籍を買いに来て通りかかったらイベントを行っていたので立ち寄った。
- ・大学の先生のお話を聞ける機会はないので、良い企画だと思った。

⑥ メンバー一覧

水越 恵	松岡 潤
佐藤 和喜	田村 夏鈴
山口 航也	山口 紗歩
佐々木 健人	黒畑 柚乃月

担当教員

根本 直樹 伊藤 泰